

フィリピンの研究者との研究交流

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐分利, 豊 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7746

フィリピンの研究者との研究交流

佐分利 豊

0 はじめに

去る6月3日(月)からの1週間、フィリピンからお2人の研究者が福井大学にお見えになりました。フィリピン大学数学研究所教授のフィデル・ネメンゾーさんと、デ・ラ・サール大学数学科講師でリリーローズ学校の中学校校長でもあるポリン・マンガラブナンさんです。お2人が見えになられたのは、当教職大学院や福井で進められている授業研究を中心とする学校改革のとりくみに強い関心を持たれてのことでした。訪問期間中、当教職大学院の他、当大学数学教室、および当大学附属小・中学校を含む福井市内のいくつかの小学校、中学校、高等学校などをほとんど休む間もなく精力的に訪問され、充実した研究交流を行って帰られました。

お2人が福井の授業研究や学校改革に関心を持たれたのは、去る2月にフィリピン・ミンダナオ島のキダパワン市で開かれた「ティーチング: 12年間の基礎教育における言語、算数・数学、社会科のカリキュラムに関する研究集会・ワークショップ」において、私が当大学附属小学校の山崎千代美先生の授業実践¹⁾を紹介してきたことによります。

1 フィリピンにおける教育改革

フィリピンでは、この6月に新しい教育制度にもとづく大改革が開始されています。ミンダナオでの研究集会・ワークショップは、その準備のために開かれた全国的な規模の集会のひとつで、現場の先生方も多数参加しておられました。その改革は、「拡大・強化された(Enhanced)2013年基礎教育法」と呼ばれる新法

にもとづくもので、これまで小・中学校の10年間であった義務教育の期間を高等学校までを含めた12年間に延長するということと、教育・学習言語の変更とカリキュラム改革とからなる教育方法の転換がその主な内容となっています。この改革は、フィリピンの初等・中等教育を21世紀の世界標準に対応させるためとされ、新法には次の教育目標が掲げられています。すなわち、この新たな基礎教育課程の修了者には、生涯をかけた学習の基盤的素養、あるいは職業に生産的に従事することのできる能力、地域およびグローバルなコミュニティにおいて実りある調和的共存を図ることのできる適応力、自律的で創造的かつ批判的に思考することのできる才能、および他者と自分自身の転換をもたらすことのできる資質と意欲を身につけていることが求められる、とされています。教育方法の転換というのは、それをめざしてのことです。

1-1 MTB - MLEの導入

まず教育・学習言語の変更というのは、これまで授業などで用いられていた言語は英語とフィリピン語の2つに限られていたのですが、それを小学校に限って、子どもたちが普段使っている言語、すなわち母語をベースとした多言語による教育・学習(MTB - MLE、Mother Tongue Based Multi Lingual Education)に移行するということです。これは、フィリピン語がおよそ170の言語の内のひとつであるタガログ語とほぼ同じであり、英語と同様に、大半の子どもたちにとっては生活言語とは異なっているという事情によります。タガログ語を使用しているのは、全人口9400万人の内

のおよそ 2200 万人であると言われています。この移行に先立つ MTB - MLE のパイロット事業でもその有効性が確認されており²⁾、国際的にも、いきなり第 2 言語を学習用語とするよりも、最初に母語(第 1 言語)をしっかりと習熟した後に第 2 言語の学習をとり入れるという方が、双方の言語学習にとって有効であるという報告がなされています³⁾。

1-2 カリキュラム開発の基準と原則

さらにカリキュラム改革ということですが、それについては、カリキュラム開発にあたっての基準と原則として以下の 8 点が新法に掲げられています。

- a) カリキュラムには、学び手を中心とする、包括的かつ発達段階に見あったものであることが求められる。
- b) カリキュラムには、今日的課題に対応した、かつ研究成果にもとづいたものであることが求められる。
- c) カリキュラムには、学び手の文化に配慮したものであることが求められる。
- d) カリキュラムには、学びへの文脈をもったグローバルなものであることが求められる。
- e) カリキュラムには、構成主義的で、探究的、省察的、協働的かつ総合化された教授法を用いたものであることが求められる。
- f) カリキュラムには、学び手の学習の現段階、あるいは彼らが既知としている所から出発して未知の領域に歩を進めるといふ、MTB - MLE の原則と枠組みに沿ったものであることが求められる。そして、そのための適切な教材と、それに適応できる教師が求められる。
- g) カリキュラムには、知識や技能の習得を確実なものとするために、スパイラルな構成とすることが求められる。
- h) カリキュラムには、学校が、それをそれぞれの地域的・社会的・文化的文脈に適合させ、さらに改善されたものとするができるよう、十分に柔軟性をもたせることが求められる。

私が上述の研究集会・ワークショップへの参加の機会をいただいたのは、この改革のめざす方向に、今日、

福井でとりくまれている授業研究を中心とする学校改革と共通する部分があるとの共通理解によるものでした。とりわけ、MTB - MLE が小学校に導入されるということで、教育改革のビジョンの共有を目的として、福井の小学校における探究的授業のとりくみを紹介したということでした。これまでの 2 言語による学習の枠組みの中で探究的学習を行うことは、大変難しいことだったのではないかと推察します。

2 学校訪問と研究交流

最初に述べましたように、お 2 人が福井の授業研究や学校改革に関心を持たれたのは、附属小学校の山崎先生による探究的授業実践の紹介を受けてということでしたので、今回の福井訪問では、できるだけ多くの学校のとりくみを見ていただくことにしました。以下、それぞれの訪問について、日を追ってその概要の紹介をします。

2-1 6月4日(火)の訪問

まず、6月4日(火)の午前中には、福井市旭小学校で、勝木先生の6年生の算数の授業を見学させていただきました。その日の問題は、2つの分数でそれらの商と差が等しい組を探すというものでしたが、算数があまり得意ではなさそうな子どもも含めて、そのような2つの分数の組みが満たす法則の解明にグループの皆で熱心にとりくんでいました。これは、勝木先生の問題設定が上手であったことによるもので、お 2 人にとって幸先のよい訪問となったように思います。

その日の午後は教職大学院への訪問となりました。まず、お 2 人からフィリピン教育改革に向けての現状と課題についての説明がなされ、ほとんどすべての先生方にとって MTB - MLE は未体験のとりくみであり、授業研究によって皆で新しい課題に挑戦していきたい、特に子どもたちが自分たちの言葉で語りあえるようになったということで、子どもたちの協働による探究的授業づくりにとりくんでみたいとのことでした。その後、お 2 人と教職大学院の 5 人のスタッフにより、午前中に見学した旭小学校での 6 年生の算数の授業についての徹底した検討が行われました。お 2 人にとっても充実した授業研究の体験となったものと思われま

2-2 6月5日(水)の訪問

続いて5日(水)の午前中は附属小学校を訪問させていただきました。まず、研究主任の名葉先生から附属小学校の研究と改革の歴史やポリシーおよび研究体制などについておうかがいし、続いて五十嵐先生の6年生の算数の授業と、青木先生の4年生の理科の授業見学をさせていただきました。算数の方は割合の表現に関する復習の授業で、理科の方は人体の全身骨格模型を使い、それぞれの骨がどのような役割を果たすのかということの探究的考察を行うというもので、それぞれにグループで熱心な議論が交わされているようすを見ることができました。特に、フィリピンでは算数・数学以外の探究的学習についてはほとんどとりくまれていないようで、その点もお2人の関心をひいたように思われます。

その日の午後は、福井市安居中学校を訪問させていただきました。ここでは、北川先生の数学の授業や、高嶋先生とALTのマーフィー先生による元気一杯の英語の授業、加藤先生による化学反応熱に関する理科の探究的授業の見学をさせていただきました。

数学の授業の課題は、校舎の中央をとり巻く大きな円形の通路の面積を求め、それをもとに同種の図形の面積を求める公式を作るという課題で、文字の使用に慣れることとその有効性を理解してもらうということを狙ったものでした。派手さはないものの、子どもたちがグループで集中して問題にとりくんでいたのが印象的でした。

その後、教頭の徳永先生と数学の見崎先生に学校改革のとりにくみ、特に放課後の校内清掃と、その後の一日をふりかえる黙想、およびそれを数行で記す日誌作りについておうかがいし、実際にそれらを見学させていただきました。これらの作業も派手さはないものの、ひとつひとつしっかりと集中してとりくまれていました。安居中学校の校舎がゆったりとした作りであること自体が、子どもたちの学習への集中を生み出す環境となっているように思われました。つまり、ゆったりとした校舎が探究するコミュニティー作りを支える物理的な条件となっているようであるということです。これらのことについては、フィリピンのお2人も同様の感想を抱かれたようです。特に、放課後の清掃、黙想、日誌作り、あるいは授業の開始時と終了時の挨拶はフィリピンにはない学校文化ではあるけれども、子

どもたちに彼らと教師および学校との関係、そして子どもたち自身をその都度ふり返らせる機会を与えるものであるとして、フィリピンに帰ってリリーローズ学校の先生方にその実施の提案をしたとのこと。その提案は歓迎されて早速実施に移されたとの知らせをいただきました。こうして、安居中学校への訪問も、あまり派手なことはなかったものの、お2人にとって意義深いものとなったようです。

この訪問では、見崎先生の提案で最後にもうひとつハプニングが起きました。2年生の数学でこれから連立1次方程式の解法を学ぶことになっており、ポリンさんにその授業を行ってほしいというものでした。ポリンさんは、1次方程式が直線の方程式であり、連立1次方程式の解が2直線の交点の座標を表すということを、ホワイトボードに図を描きながらほのめかしました。子どもたちは、直線の方程式についてはまだ学習していなかったのですが、そのほのめかしを読みとり「オーッ！」とどよめき、その後も話がひとつ進むごとに拍手と歓声で喜びと感激を表してくれました。このことは、安居中学校の子どもたちが学びの喜びを数多く体験しており、その期待感をもって学びに向かっているために起こった反応なのだろうと思われました。また、ポリンさんのミニ授業は英語でなされ、所どころ私が単語の意味を補足することで通じていたのですが、子どもたちは、ALTの先生との日常的な英語の会話の体験をしているものの、それが他の教科の学習でも同様に通じるものなのだという体験をしたことは、別の意味で貴重なものとなったのではないかと考えています。

2-3 6月6日(木)の訪問

翌6日(木)の午前中は附属中学校を訪問させていただきました。研究主任の森田先生、英語の加藤先生および教頭の大正先生から附属中の研究や改革の課題についておうかがいし、質疑応答が交わされ大いに共感しあうことになり、ひき続き研究交流ができればとのことになりました。その後、大正先生の方眼用紙を用いて作った整数値の面積を持つ正方形を組みあわせて平方根どうしの間になりたつ関係を見つけだすという授業を見学させていただきました。ここでは、見つけだされた関係が成りたつ理由を明らかにすることが目標なのですが、子どもたちが、結論を急ぐことなく、自分

たちの推論の根拠を丁寧にふり返りながら進めているのが印象的でした。自立した学び手への一步を踏みだし始めている姿を見ているようにも思えました。ここでも子どもたちの集中した学びの姿を見ることができました。

続いてその日の午後は、藤島高等学校を訪問し、山内先生の数列の授業を見学させていただきました。その日は、ハノイの塔の漸化式を実験のくり返しによって求めるというのが課題でしたが、その漸化式が成り立つ理由の説明を全員で共有するためにはやや時間が足りなかったかという印象でした。しかし、ここでも子どもたちがグループごとに集中して作業に取り組んでいる姿を見ることができていました。その後に行われた授業のふり返りでは、ポリンさんと山内先生との間で協働研究ができればとのことで、ここでも研究交流の継続を求める声が双方から出されていました。

さらにその日の夕方は、当大学の数学教室を訪れ、フィデルさんが自身の整数論の研究の講演をしてくださいました。フィデルさんはフィリピンにおける数学研究のリーダーの1人で、今回、そのような人が福井の初等・中等教育の見学に訪れたことは、フィリピンの人たちの教育改革にける強い意気込みを表しているのではないかと思います。

2-4 6月7日(金)の訪問

さて最終日の7日(金)ですが、その日は附属中学校の公開研究会に参加させていただきました。この日の研究会の参加者数は500名ほどであり、そのこと自体、お2人にとっては印象的なことではなかったかと思われる。数学科では、草桶先生と柳本先生のお2人の研究授業を見せていただきました。ここではそれらの授業もさることながら、その後の分科会でさまざまな意見交換がなされたことが、フィリピンのお2人にとっては印象的であったようです。

3 おわりに

以上、お2人の福井での交流について簡単に紹介してきましたが、それぞれに意義深い、あるいは内容豊かなものであったことを推察いただけるのではないかと思います。このことは、福井における学校改革が一定程度前進あるいは定着しつつあることを示しているのではないかと思います。実際、毎回の授業見学ごとに、子どもたちの集中した学びの姿を見ることができたことと記してきましたが、このことは率直に言って私が7年前に福井に来たときと比べて大きな変化です。それが何故なのかというのは現場の先生方におうかがいしなければ本当のところは分からないのですが、実際に見学をさせていただいた私の印象からは、それぞれの学校での探究的学習の前進と定着を示しているのではないかと思います。

また、今回、フィリピンからお2人の研究者がお見えになられましたが、これからもさまざまな人々との交流が広がっていくことを期待します。

注)

1) 山崎千代美、算数の学びを「つながって、つくる」そして「いかす」、研究紀要第32集、2007年福井大学教育地域科学部附属小学校

2) Dutcher, Nadine, Richard Tucker; The use of first and second language in education, A review of international experience. Pacific Islands Discussion Papers No. 1, Washington D.C., The World Bank, 1994

3) Alidou, Hassana, Aliou Boly, Birgit Brock-Utne, Yaya Satina Diallo, Kathleen Heough and H. Ekkehard Wolff. 2006. Optimizing learning and education in Africa—the language factor. A stock-taking research on mother tongue and bilingual education in sub-saharan Africa. Association for the Development of Education in Africa.